

社会福祉計画論序説〔IX〕

——「方法論統合化」の課題——

高 田 真 治

I 伝統的方法モデルによる統合化

I-i 「方法論統合化」の意味

いわゆる「方法論統合化」のカテゴリーには、一般に3つのアプローチが含まれている。

第一は、伝統的な方法論を前提として、状況に応じて使い分けられないしは組み合わせようとする考え方である。したがって専門職とはこれらの方法の全てをマスターしているか、少くとも何れかを主として修得し、他を補助的に使うものでなければならぬ。

第二は、伝統的方法論の中に共通にみられるソーシャル・ワークの原則や技術を抽出し、これを共通の基盤としてソーシャル・ワーク実践の方法を組み立てようとするものである。したがって専門職は、社会福祉実践の焦点を明確にし、その問題解決のための多様な技術、知識、および価値観に基づいた介入のレパートリーが必要とされる。

第三は、前二者とは全く異なった、伝統的方法論には基かない新しいアプローチをとるもので、ソーシャル・ワークの基本的視点を確認し、問題解決の課題、計画的変革のための専門的介入という立場から方法を再考しようとするものである。したがって専門職は、基本的視点に基づいた介入の方法を確立するための枠組——例えば、一般システム論——についての知識を必要とする。

今日的なソーシャル・ワークの状況において、伝統的方法論の再検討に基づいて提起された「統合化」の背景には次のような課題がある。すなわ

ち、社会福祉方法論そのものの基本的視点を再考することなく、対象の拡大に対応して、伝統的にそれぞれ分担してきたものを「結合」することによって対処することのみを意味するのか、それで基本的解決になるのであろうかという疑問であり、これが検討の課題とならざるを得ない。今日この「統合化」の必要性について確認できることは、「いずれもが伝統的アプローチとその基本的認識を前提とする combination approach や multimethod approach のとらえ方にたつ『統合化』アプローチによっては社会福祉実践活動が『断片化』され、『専門的近視眼』という狭い枠のなかに閉じこめられがちになって、実態に対応せず有効性をもちえなくなっているという結果——なかならず実証による結果に対する反省批判に基づいて主張されている点であり、¹⁾この事実を吟味せねばならないであろう。

以上、「方法論統合化」の議論の中には、

- (1) combination approach あるいは combined method model,
 - (2) multimethod approach,
 - (3) generic model また unitary approach,
- という用語で示される3つの方向のものを含めて議論されている。しかし方法の「統合」という限り、ケースワーク、グループ・ワーク、コミュニティ・オーガニゼーション（以下 C.O.）という伝統的方法が前提されているわけであり、この意味において「方法論統合化」の中に前二者とはアプローチの異なる(3)をも含めることは、「統合化」の文字通りの意味からしてふさわしくないと考えられるのである。したがって「方法論統合化」に

1) 小松源助、『社会福祉実践活動における方法の統合化—その具体化をめぐる課題—』、社会福祉研究、第19号、1976、p. 53.

おける前述の新しい3つのアプローチを、「伝統的方法モデルによる統合化」および、個人と環境の相互作用をソーシャル・ワーク実践の焦点として、その問題解決に向けて計画的に変革していくとする「介入モデルによる統合化」の2つに分けて検討することが妥当であろう。

I-ii combination approach

R. ベイカーはジェネリック・ソーシャル・ワークの概念の発展をレビューし、ジェネリックな教育を受けたソーシャル・ワーカー、熟練した実践者の必要性を強調しているが、彼によれば、理論的發展に対応する3つのモデルとは、**method**, **multimethod**, および **generic approach** である。この **method approach** がここでとりあげるモデルであって、「ケースワーカー、グループ・ワーカー、コミュニティ・ワーカーの専門的役割を支える特定の技能および特殊な知識を強調する、」²⁾ 伝統的アプローチを示している。したがって伝統的なソーシャル・ワークの方法——ケースワーク、グループ・ワーク、C. O. という特殊専門分業化された方法を前提とした、いわゆる「統合化」の方向は、必然的にそれらのうちのいずれかの方法を主とし、他の1つないし2つの方法が、その実践過程での必要に応じて補うという形——主専攻、副専攻型となる。これは最も初歩的かつ一般的な「統合化」のあり方であろう。

この考えに立つソーシャル・ワークの技術再検討の具体的な試みが、わが国でもみられる。すなわち、一人のワーカーがその扱う問題解決過程において、基礎的な3つの方法に加えて、ソーシャル・ウェルフェア・アドミニストレーション、ソーシャル・ワーク・リサーチ、ソーシャル・アクションという6つの専門技術をいかに動員すべきであるかを、ソーシャル・ワークを一体のものとして把握するという立場から検討したものである。すなわち、ソーシャル・ワークの本質的対象は、元来、社会的障害問題の担い手としての個人、集団、また地域社会であるが、それぞれの専

門技術は対象に向って働く援助機能上の区分であって、それなりに有効であるにすぎない。したがって、「社会的問題自体は、そういう区分に関わりなく、対象に体现しているわけであるから、同一対象に向けてさまざまな技術が重ねて使用されるのは当然であるし、またそうしなければ、問題解決機能はその力を十分に発揮することはできないのである。」³⁾

このアプローチは、実践の有効性という観点からは極めて妥当性をもっているし、また理解しやすいのであるが、しかし現実の問題として、ことに教育の観点から以上の6つの方法全てを個人がマスターしうるかという疑問が提起される。したがって、この方法の併用ないし組合せという見地に立てば、一人のワーカーがそれらの方法のいくつかを“レパートリー”としてもっているという考え方とともに、他方それぞれの方法をマスターしたワーカーを“チーム”として組織化するという、もう1つの方向が考えられねばならないであろう。

以上から明らかなごとく、このアプローチは必ずしも新しいものとはいえない。伝統的方法への固着、タコツボ現象といっても、現実に解決すべき問題に直面した場合には、ケースワークを行うグループ・ワーカー、グループ・ワークを行うコミュニティ・オーガナイザーなどがいたであろうし、またチームの構成、コンサルテーションも実施されてきたといってよい。したがって、このアプローチは、プラクティカルに、ある場合には試行錯誤的に行われてきたものを理論的に整理したものであると考えてよいであろう。

I-iii multimethod approach

伝統的方法モデルに基く統合化の第二の方向は、「既成の方法の区別を保持しているが、それらの全てに共通な假定、原則および技能を強調する、」⁴⁾ **multimethod approach** である。この考え方は、既に検討したパートレットを中心とするソーシャル・ワーク実践論の再検討に示されるも

2) Ron Baker, "Toward Generic Social Work Practice—a Review and Some Innovations," *The British Journal of Social Work*, vol. 5, No. 2 (Summer 1975), pp. 193—194.

3) 大塚, 井岡, 木内編, 「社会福祉の専門技術」, ミネルヴァ書房, 1975, p. 156.

4) R. Baker, op. cit., p. 194.

のであり、前述のように方法を並立させるというものではないが、伝統的方法論を前提として、その実践の共通基盤を確立しようとするものである。

例えば、J. ウィタカーはソーシャル・ケースワークとソーシャル・グループ・ワークを、単一の方法の枠組へ統合する人間関係を援助するアプローチとして、“social treatment”を提起している。すなわち、今日治療の実践という心理学的観点への強調は、次第に人間関係の援助の社会的側面へとその強調点を移しつつある。人間は、彼をとりまく社会関係の複雑な網の中にいるのであるから、治療の概念は状況の援助を包含するように拡大されねばならない。つまり social treatment は個人、家族、小集団を援助することに関心があるミクロの介入であって、その焦点は C. O. や社会計画および他の「大きなシステム」変革のアプローチとは異なっている。この人間関係の援助は心理療法的援助に限定されず、ワーカーがクライアントとともに、あるいはクライアントのために直接、間接になす広範な活動を含んでいるのである。

この social treatment は次のごとく定義される。「social treatment とは、人間関係を援助するためのアプローチであって、これは個人、家族、および小集団の社会的機能を高めまた社会問題に対抗できるよう援助するために直接的、間接的な介入の戦略を活用するものである。」⁵⁾ すなわち、ここで注目すべきは、この social treatment を“アプローチ”として考え、特定の方法あるいは治療の様式とは考えていないことである。ウィタカーはこの理由として、次のような、特定の方法志向をとる場合の二重の危険性をあげている。

1. 援助のための新しい理論や技術 technology が活用される可能性を減ずる——実践における革新を阻害する傾向がある。
2. 方法への第一義的忠誠は、クライアントとその社会的問題を、援助の方法に適合させようと

するワナにはまる可能性のあること⁶⁾、以上である。

I. スパーゲルは同じアプローチから多次元モデル multidimensional model を提起しているが、これもこのカテゴリーに含めて良いであろう。すなわち、理念的にソーシャル・ワーカーは実践のためのモデルを必要としている。これは、人間の行動および社会・文化的組織についてのさまざまな適切な体系から導かれる、行動のための知識と方向を体系的に統合するものである。そうした統一モデル unified model は今日存在しないので、少くとも得られる部分的知識の最大限の活用は可能である。ソーシャル・ワーク実践のための多次元的アプローチはこの段階で要求される⁷⁾。したがってこのアプローチは、理解と科学の応用のために幅広い基礎を必要とする。単一の方法志向から、社会問題の分析と人間—社会問題解決におけるソーシャル・ワーク技能と技術の広範な使用へと移らねばならないからである。

このアプローチは、ソーシャル・ワーク実践のために少くとも次の3つの主要な意味をもっている。すなわち、

1. 主たる3つのソーシャル・ワークの方法を知っており、またその能力のあることが要求される。
2. 基本的なソーシャル・ワークの地位の構成単位として、general practitioner の位置が開発されねばならない。
3. ソーシャル・ワーク実践者は、人間—社会問題および、いかに彼がそれに対処してきたかということに関する体系的データと洞察の記録をとる責任がある。これによって統一アプローチ unified approach は、いつの日か開発され検証されるであろう⁸⁾。

スパーゲルは、この多次元モデルを統一モデルに至る段階としてとらえているのであるが、この multimethod あるいは多次元モデルは、概念があいまいなものとなっている。例えば、“家族へ

5) James K. Whittaker, *Social Treatment*, Aldine, 1974, p. 49.

6) *Ibid.*, pp. 43—54.

7) Irving Spergel, “A Multidimensional Model for Social Work Practice: The Youth Worker Example,” Klenk and Ryan ed., *The Practice of Social Work*, Wodsworth, 1970, p. 308.

8) *Ibid.*, p. 318.

働きかける多次元モデル”について D. モスティンは、その理論的枠組として一般システム論を、そして介入の用具として「課題志向の社会単位 **a task oriented social unit**」を用いている。すなわち、このアプローチの目的は、家族問題を解決することではなくて、システムを再構成しまた創発的な特性を発揮することによって、新しいエネルギーか新しい知識、あるいはその両方という形でシステムを修正しようとするものである⁹⁾。したがってシステム論の枠組で評価を行い、その焦点は環境における個人および家族 **person-and family-in-environment** にあり、次の3つの次元に関する評価を行う。

1. 家族システムの機能に関連している家族集団の成員個々の心理的力動性。
2. 家族システムにおける人間関係の力動性。
3. 個々の家族成員および集団としての家族と、家族の機能に関連した環境システムとの相互作用¹⁰⁾、以上である。

伝統的方法としてのケースワーク、グループ・ワーク、C.O. (およびアドミニストレーション、リサーチ、ソーシャル・アクション) を前提とした「統合化」は、以上の2つの方向をたどるであろう。しかし後者はすでに検討したように、それらに基づいてソーシャル・ワーク実践の「共通の基盤」あるいは「理論的枠組」をさぐるといっても、実践においては「介入のレパートリー」というように **combination approach** と明確な区別がつけ難く、またその理論的枠組も未整備のまま多様なものを含んでいるようであり、**multimethod** の意味をさらに厳密に検討する必要があると思われる。

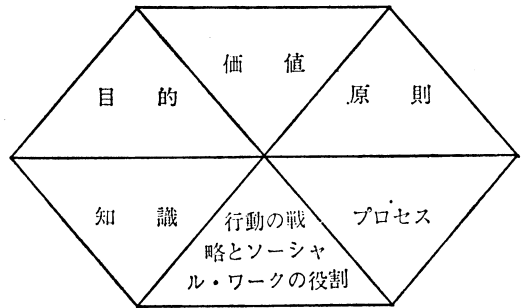
II 介入モデルによる統合化

II-i generic social work practice

これはソーシャル・ワークの実践をして新しい包括的 **holistic** な性格につくりかえようとするもので、その型、あるいはモデルは、ソーシャル・

ワーク実践の本質および構成要素を詳細に描こうとするものである。またソーシャル・ワークが関与している介入的活動の範囲を明らかにし、かつ導くところの一般的原理および理論的支えを提供するものである¹¹⁾。したがって、ソーシャル・ワーク介入の焦点となる個人、集団は、諸関係すなわち心理および社会システムのネットワークとしてとらえられる。これは“**client unit**”を心理的、身体的な過去および現在の状態、家族、小集団、近隣およびコミュニティに結びつけているものである。この視点にたった新しいソーシャル・ワーク・アプローチが必要とされるのであり、このためには次の三点について考察されねばならないであろう。すなわち、1) ジェネリックな実践理論 **generic practice theory** の定式化、2) 学生をして介入の戦略の技能を身につけさせるための教育方法の開発、および 3) ジェネリックな訓練および実践が生ずる場の提供、以上である¹²⁾。

そこでベイカーは、パートレットやゴードンによる実践者の検討から、ソーシャル・ワーク実践におけるジェネリックな要素について検討し、その再構成を試みている。すなわち次の6つである¹³⁾。



以上のような作業は、ソーシャル・ワークの方法そのものを基本的に再検討しようとする試みに他ならず、これを通して「統合化」を具体化していこうとするものであるといえよう。そこで、このための基本的要件として次の三点があげられる。

9) Danuta Mostwin, "Multidimensional model of working with the family," *Social Casework*, Apr. 1974, p. 209.

10) *Ibid.*, p. 211.

11) R. Baker, *op. cit.*, p. 194.

12) *Ibid.*, p. 196.

13) *Ibid.*, pp. 197-201.

1. 専門職としての社会福祉実践活動の共通基盤の確立。
2. 方法の統合化のためのモデルの構築。
3. 方法の統合化に対応するカリキュラムの編成¹⁴⁾、以上である。

70年以降、アメリカ、イギリスにおいてこの研究が活発になってきたように思われる。ことにアメリカは、COS およびセツルメントをその前史的形態として、伝統的ソーシャル・ワークの方法たるケースワーク、グループ・ワーク、C. O. を体系化したところから、アメリカ・ソーシャル・ワークは「技術論」とされるのが一般的であり、このことからアメリカ・ソーシャル・ワーク論を直輸入したわが国においては、いわゆる「政策論か技術論か」という二元論的な議論が生じたりしたのであった。しかしながら1960年以降、M. レインや A. J. カーン等を中心とした社会福祉政策、社会変革あるいは社会計画に関する優れた業績がみられるようになった。これはウィレンスキーとルボーのいう **residual** なものから **institutional** なものへの移行という、一つの実証ともなっているが、要するにソーシャル・ワークは、社会福祉政策をその視野の中に含め、明確にとらえられねばならないであろう。

前述の伝統的ソーシャル・ワーク論のうちで、この視点がみられるのはソーシャル・アクションをその中に含む C. O. であった。しかし60年以降の社会の激変、そしてその中であって翻弄されるクライアントの問題解決は、「ソーシャル」な視点なくしては問題の明確化（診断）すら十分なされなくなってきたといえるのである。すなわち、**person-situation** を相互作用として二分法的にとらえようとする、および対象であるクライアントの大きさでもって、方法を決定しようとするなど、たいする反省がたかまってきたのである。したがって、ここでソーシャル・ワークとは、その実践とは、方法とは何か、という原点にたちもどって再考するという動きは極めて妥当であるといわねばならない。

以上を要約すれば、これからのソーシャル・ワーク研究の方向は2つある。一つは、社会福祉固

有の視点の確立とそれに基づく社会福祉理論の体系化、もう一つは、社会福祉政策ないし社会福祉計画の体系化である。本稿のシリーズでは、主として前者との関わりにおいて後者に関する「序説」として、その基礎的考察を試みていることを今一度明らかにしておこう。

ジェネリック・ソーシャル・ワークの成立には、ソーシャル・ワーク方法論、実践論の再考が不可欠である。これらのうちで代表的なものは次の人達であろう。A. ピンカスと A. ミナハン、H. ゴールドスタイン、および B. コンプトンと B. ギャラウェイ、以上である。そこで以下に、それぞれの理論についてその要旨をとりあげ検討してみることにしたい。

II-ii ピンカスとミナハンの理論¹⁵⁾

彼らは既にのべたように、伝統的ソーシャル・ワーク理論に対する批判に基づいて、新しいソーシャル・ワーク実践のためのモデルの開発を試みているのであるが、これは目標志向の計画的変革過程 **goal-oriented planned change process**——特定化された目標あるいはアウトカムを達成することであり、単に理論的志向にとどまるのではなく、モデルの要素を体系化する場合に、一般システム論を活用することにあつた。

今日われわれは、フォーマル、インフォーマルおよび社会的 **societal** な3つの資源システムからの援助を得ることが可能であるが、しかし現実には、人々の生活の諸課題 **life tasks** にとり組むために必要な資源、サービス、機会等を得られないことがしばしばである。したがって、この人々と資源システムとのつながりと相互作用、および個人とシステム双方の機能において直面する問題に焦点をあてることが不可欠である。すなわち、「ソーシャル・ワークは人々とその社会環境との相互作用に関するものであり、これは彼らの生活の諸課題、苦悩の緩和、熱望や価値の実現を達成するための人々の能力に影響を与えるものである。それ故ソーシャル・ワークの目的は次のごとくである。

1. 人々の問題解決能力および対抗 **coping** 能力

14) 小松源助、前出、pp. 54—57.

15) Allen Pincus and Anne Minahan, *Social Work Practice: Model and Method*, Peacock, 1973.

を助長すること。

2. 人々に対して資源、サービス、機会を提供するシステムと人々とを結びつけること。
3. これらのシステムの効果的かつ人道的な運営の促進。および、
4. 社会福祉政策の発展と進歩に貢献すること、以上である。]¹⁶⁾

繰返すならば、ソーシャル・ワークの機能は、人々の問題あるいは資源システムの問題にあるのではなくて、人々と資源システム、および資源システム間の相互作用にあるのであって、ソーシャル・ワークの実践とは意識的、慎重かつ目的的な計画的変革のための努力を意味している。したがってこの観点に立てば、誰の標準 **standard** をもって変革が必要であると決定するのか、変革に影響を与える合法的手段は何か、アウトカムをいかに評価するか、という実践者の価値観、専門性にかかわる価値ないし倫理と知識との差違を認識しておかねばならないのである。

ソーシャル・ワーカーはいろいろな人と出会い、また事態に遭遇するが、以上の観点から次のものとの関連で自らの役割が明確にされねばならない。すなわち、

変革推進者のシステム **change agent system**,
クライアント・システム **client system**,
目標システム **target system**,
行動システム **action system**,

以上である。したがって、ソーシャル・ワーカーは変革推進者 **change agent** としての役割を果たすためにいくつかの実践技能を習得している必要があるが、その基本的なものは、データの収集、データの分析と意思決定、および介入であって、これらは次の計画的変革プロセスの全ての局面で用いられるものである。

1. 問題の認識——クライアント・システムとの契約 **engagement**
2. データの収集——4つのシステムの明確化とクライアント・システムとの契約 **contract**
3. 診断——行動システムの形成
4. 介入——行動システムの運営

5. 評価と終結

II-iii ゴールドスタインの理論¹⁷⁾

これは伝統的ソーシャル・ワークの方法に焦点をおいているのではなく、ソーシャル・ワーク実践の一元的モデル **unitary model** を検討しようとするものであり、行動科学、社会科学から諸概念を導入することによって達成しようとするものである。そこで、この概念は、次の3つの主たる枠組において体系化される——1) 社会システム・モデル、2) 社会的学習あるいは問題解決モデル、および 3) プロセス・モデル、である。

「ソーシャル・ワークとは、人間が個人的・集団的に、あるいは個人的にか集団的にか、その社会的実存における崩壊を防ぐことができる諸手段を助長し、維持し、増加させるところの社会的介入 **social intervention** の一形態である。専門職の本質は、次のものと結びついた認識によって支配される——ユニークかつ積極的な有機体としての個人、力動的な勢力としての社会環境、およびそれらの相互作用の効果、以上である。]¹⁸⁾ したがって専門職としてのソーシャル・ワーカーは、相互作用という複雑なシステムに入り込み、明白な目標を獲得する手段として、意識的に以前の状態やバランスを変えようとする——社会的介入を行うのである。この介入行為はいろんな形態をとり、様々なタイプの人間社会の中で表現されているが、基本的には次の4つの相関した要素によって導かれる。すなわち、1) ソーシャル・ワークの計画性 **intentionality**、2) 知識と情報の認識、3) 戦略、および 4) 人間関係、以上である。

社会的介入とは、社会的学習が最大になるように援助することであって、具体的・本質的な知識、心理学的、また社会的な情報を得ることによって自他の行動パターン、環境を認識し、新しい行動パターンを学習させることである。すなわちソーシャル・ワーク実践の基本的構造は、次の3つの相関した変数の複合体として示される。

1. 専門職の明確な目的。
2. 社会的介入という形態による実践。

16) *Ibid.*, p. 9.

17) Howard Goldstein, *Social Work Practice: A Unitary Approach*, Univ. of South Carolina, 1973.

18) *Ibid.*, p. 4.

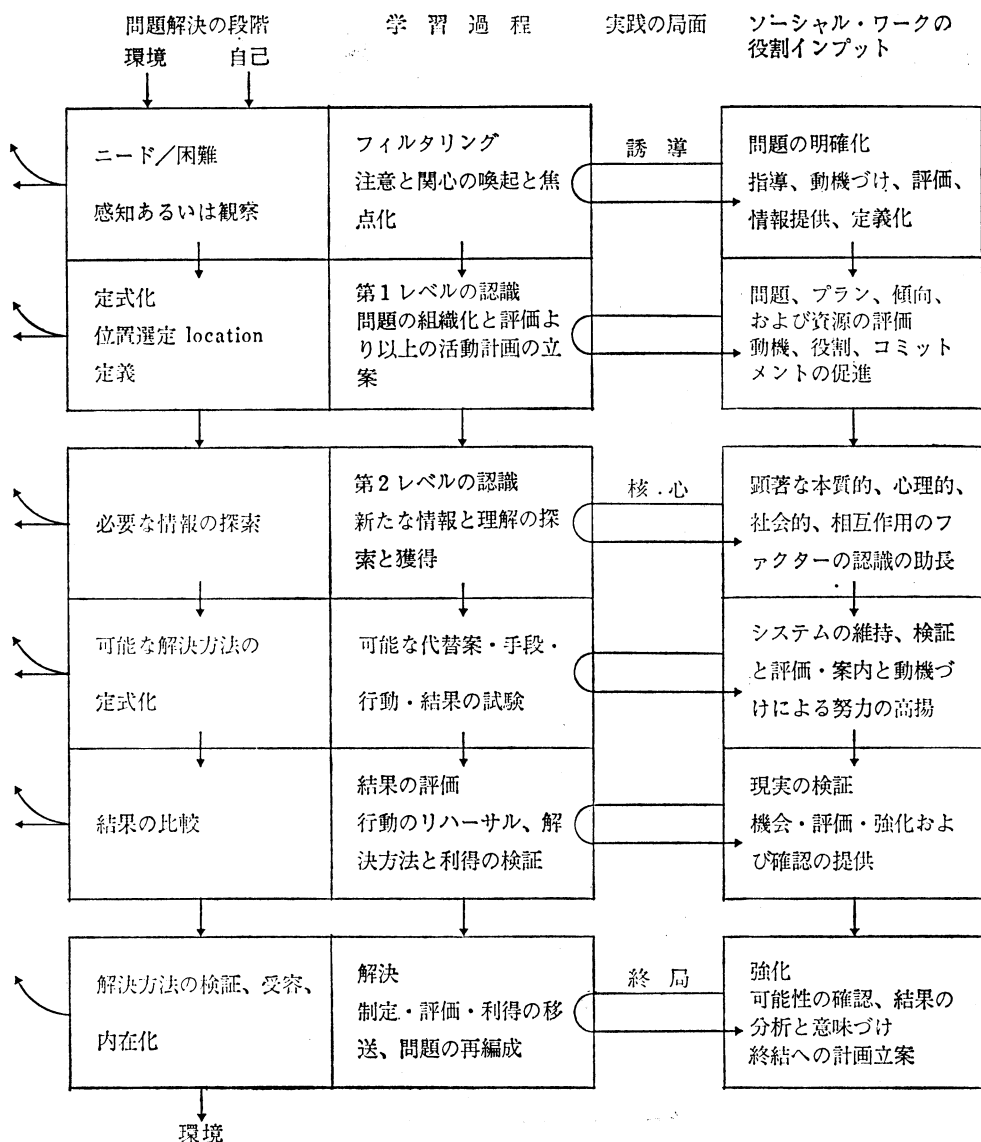
3. 人間の経験のための、社会的および行動の志向。

ソーシャル・ワーカーの特性は、注意深い自己、直観性、および役割特性という3つの相関した変数で示される。役割とは人間関係の産物であり、役割概念、役割期待、役割遂行より成るが、権威者 **authority** としての役割、社会化の役割および価値の体系を有していなければならず、これらがクライアント・システムに対して、直接

的・間接的、またシンボリックな影響を及ぼすことによって、望ましい変革の内容と手順を秩序だててまた方向づけるものである。

以上の検討を基礎として、システムとしてのクライアントおよび変革システムが示されるが、これら変革システムとしてのソーシャル・ワーカーとクライアントとの間の、目的的かつ問題解決のための連携をすすめる要素が社会システムであり、相互作用の力動性としての関係である。ここ

図1 問題解決および関連したソーシャル・ワーカーの役割のインプットを示す操作的モデル¹⁹⁾



19) *Ibid.*, p. 174.

では社会システムは、ソーシャル・ワーカーとクライアントとの連合として把握され、構造的・機能的特性を示すものであり、内的・外的諸資源からのインプットを包含している。そこでこれらの様々な現象を全体的な観点から説明するためにシステム論を援用しようとする。すなわち、システム論はソーシャル・ワーク実践の全ての局面で遭遇する現象に等しく適用できると考えられている。これは人間を他の人々、集団、あるいは社会との関係で理解しようとすることであり、それらを閉鎖的な独立した単位としてみるのはもはや不適当であろう。

ソーシャル・ワークの目的である社会学習と社会変革は、次の問題解決モデルで示される。すなわち、このモデルは操作的なものであり、次の点を示すようデザインされている。

1. 問題解決の段階。
2. それに伴う学習過程。
3. 各段階におけるソーシャル・ワーカーの教育的役割というインプット、以上である。

プロセス・モデルは、実践における関連した3つの変数から成っており、相互変換の流れを順次把握するために有用である。すなわち、それら変数とは戦略、目標 **target** および実践の局面であり、実践の局面は図1に見られるように誘導 **induction**、核心 **core** および終局 **ending** という段階が示され、一方戦略とは、調査と評価、意図 **intention** と介入、および評価 **appraisal** である。目標については個人、家族・集団、組織・コミュニティと明確に分けているが、これは専門的サービスを受ける社会的単位であり、分離したものとは考えていない。何故なら、既にのべたごとく、それらのうちの1つに関わる、すなわちそれら目標とする実践は、それが他の全てのものの一部であるか、それらを包含しているのか、あるいはいかなる関係にあるかという認識を必要としているという前提に立っているからである。以上の3つの変数を軸とする立体モデルがソーシャル・ワーク実践のプロセス・モデルである。

II-iv コンプトンとギャラウェイの理論²⁰⁾

コンプトンとギャラウェイは、ソーシャル・ワークを次の3つの側面からとらえ検討している。すなわち、1) 問題解決過程、2) クライアント・ワーカー関係、および 3) 合理的過程、以上である。前述のごとく、伝統的概念としてのケースワーク、グループ・ワーク、C. O. の弱点を指摘しているのであるが、彼らによれば、**social work generalist** とは、要するに何をなすべきかを決定する **deciding-what-to-do** 技能にたけた人のことであって、彼は特定の方法論にコミットすることによる制限はなく、個人と状況の相互関係全体に注意を集中するのである。この過程では、個人、状況また両者の相互作用に関する変数を自由に検証するが、データの収集と評価の能力が不可欠となる。さらにワーカーは、クライアントに対して広範な介入戦略を提供する必要がある。すなわち、決定事項の実施 **doing-the-decided** が **generalist** の責任である。したがって、**deciding-what-to-do** と **doing-the-decided** における技能と行動が検討されねばならないのである。

このソーシャル・ワーク実践としての問題解決過程とは、ワーカーとクライアントとが共同してすすめるプロセスのことであるが、著者らは、この問題解決の枠組をとり上げた理由として次の諸点をあげている。

1. 「相互作用」という視点から問題の本質や所在を確認する。
2. 問題の明確化、目標の設定によって適切なデータ収集の方向が示される。
3. データの収集、処理の枠組としてシステム論の使用が可能である。
4. 特定の問題およびクライアント・システムにふさわしい理論志向の選択を可能にする。
5. クライアント・システムとの交渉によって問題の明確化、目的の決定を図る。
6. したがってソーシャル・ワーカーは具体的な課題、活動を行なうことが要求される。

クライアント・ワーカー関係としてのソーシャル・ワークとは、この過程がワーカーとクライアントとのパートナーシップでもってすすめられるべきだということである。すなわち、ワーカーの

20) Beulah R. Compton and Burt Galaway, *Social Work Processes*, Dorsey, 1975.

側における参加は、クライアントの側における参加と同様不可欠であって、ワーカーとクライアント双方からの共同のインプット、共同の意思決定、共同の介入がなされねばならない。この根底にあるのは、人間は自らの生活 *lives* をコントロールすることを欲しているものであり、したがってその決定に参加する機会を与えれば、それが可能になるという仮定である。

以上のように、問題解決過程とは、ワーカーと

クライアントが共同して問題を明確化し、目的を特定化し、その目的の達成に向けて努力してゆくという合理的なプロセスなのである。コンプトンとギャラウェイは、このプロセスを詳細に検討しているが、そのうちの簡潔なアウトラインによれば次のごとくである。

接触段階 *contact phase*

I 問題の明確化と定義化

II 目標の明確化

表1 介入モデルによる統合化論

	A. Pincus and A. Minahan Social Work Practice : Model and Method. 1973	H. Goldstein Social Work Practice : A Unitary Approach. 1973	B. R. Compton and B. Galaway Social Work Processes. 1975
研究の目的	新しいソーシャル・ワーク実践のためのモデルの開発	ソーシャル・ワークの一元的モデルの構築	ソーシャル・ワーク・プロセスの検討
ソーシャル・ワークの焦点(基本的視点)	人々と社会環境(資源システム)との相互作用	有機体としての個人、力動的な社会環境および両者の相互作用	個人と状況との相互作用の全体
ソーシャル・ワーク実践の概念	goal-oriented planned change	social intervention	social work intervention
ソーシャル・ワークの目的	問題解決・対抗能力の助長 人々と資源システムとの結合 システムの人道的運営 社会福祉政策の発展と進歩への貢献	社会的学習 社会変革	問題解決 クライアント・ワーカーの共同関係の形成 合理的過程の遂行
ソーシャル・ワーカーおよびその技能	change agent データの収集と分析 意思決定、介入	change system (介入的行為による変革者) 知識と情報の認識 戦略(調査、介入、評価)	generalist データの収集と評価 介入戦略の提供
ソーシャル・ワーク・プロセス	変革プロセス 問題の認識 データの収集 診断 介入 評価と終結	問題解決の段階 ニーズの定式化 情報の探索 解決方法の定式化 結果の比較 解決方法の検証	問題解決のプロセス 接触段階 契約段階 活動段階
システム論の意義	モデルの要素を体系化するために用いる。すなわちその基礎的システムは、 change agent system, client system, target system, action system である。 change agent としてのソーシャル・ワーカーは、実践の過程で、これらとの関わりで自らの役割が明確にされる。	社会システム——変革システムとしてのソーシャル・ワーカーとクライアント・システムとの相互作用——の理解。 ソーシャル・ワーク実践の全ての局面で遭遇する現象の説明。	概念枠として用いる——単なる知識の体系としてではなく、分析の用具、思考の方法、より包括的な方向性を与えるものとして。 13項目にも及ぶシステム論の潜在的価値が提示される。

Ⅲ 予備的契約

Ⅳ 探索と調査

契約段階 contract phase

Ⅴ アセスメントと評価

Ⅵ 活動計画の定式化——介入への相互指針

Ⅶ 予後（予測）

活動段階 action phase

Ⅷ 計画の実施

Ⅸ 終結

Ⅹ 評価

以上、介入モデルによる統合化について、三組の所論に基づいて検討してきた。そこで、それぞれについて、研究の目的、ソーシャル・ワークの焦点（基本的視点）、ソーシャル・ワーク実践の概念および目的についてはどのようにとらえているか、またソーシャル・ワーカーの機能・技能、およびソーシャル・ワークのプロセスとはどのようなものであるのか、さらにそれぞれがソーシャル・ワークにおけるシステム論の意義をどのように考えているか、これらについて表に整理すれば表1のようになるであろう。

Ⅲ ソーシャル・ワークにおける システム論の意義

以上、ピンカスとミナハン、ゴールドスタインおよびコンプトンとギャラウェイそれぞれのソーシャル・ワーク実践の考え方について検討してきた。重複をおそれず、敢えて大ざっぱなまとめをするならば、それらに共通していることは、ソーシャル・ワークの基本的視点とは個人と環境との相互作用に焦点をあてることであり、問題解決とは、この相互作用に介入し、計画的・合理的に変革することを意味している。したがってソーシャル・ワーカーとは、クライアントとの共同関係を前提として、この変革のために要求される介入戦略を行使していくのである。

では、システム論を援用することにはどのような意義があるのか。これは個人と環境との相互作用を、ソーシャル・ワークの基本的視点とするの

であるから、これを二元論的にではなく、全体として包括的に理解する概念枠として最もふさわしいという点にある。すなわちソーシャル・ワークを構成する基本的システムの分析、プロセスの設定、これら両者にかかわるソーシャル・ワークの役割と介入戦略など、ソーシャル・ワーク実践の全ての局面で遭遇する現象を説明しうるのである。

システムズ・アプローチ、その要素については既に検討したが²¹⁾、システム論の特徴は、第一に分析的枠組を用いることである。相互作用というダイナミックな観点と同時に、システムの構成要素、またそのハイアラキーなども含めて分析を行なう。第二は問題解決志向である。分析はいかに問題解決を合理的にすすめるか、という観点からなされねばならない。第三は目標設定の客観性である。以上のデータに基づいて問題の明確化がなされることは同時に、目標が客観的に示されることとなる。そこでいくつかの代替的な解決方法（介入戦略）の評価も可能となるであろう。

G. ハーンは、周知のごとくシステム論のソーシャル・ワークへの導入に関する優れた編集をしているが、そのねらいを次のごとくいう。「われわれの専門家としての使命を全とうし、そして次の世代のソーシャル・ワーカーを育てるためにはソーシャル・ワーク実践の新しい知識と体系化された包括的な概念が必要とされるであろう。システムズ・アプローチはそのような1つの可能性を提供するものであり、本書はその潜在的な貢献を探索しようとするものである。」²²⁾

そこでソーシャル・ワーク実践の包括的な概念を開発する可能性を次の側面から探ろうとしている。すなわち、1) 理論の構築、2) 人間組織の本質、3) ソーシャル・ワークの本質、焦点、4) 変革の戦略、および 5) ソーシャル・ワークの学習と教育、以上である。この結果、結論としてここで指摘される3つの貢献とは以下のごとくである。

1. システムという概念の有用性を論証したこと。

21) 拙稿、『社会福祉計画論序説〔Ⅳ〕』、関西学院大学社会学部紀要、第31号、昭50。

22) Gordon Hearn ed., *The Systems Approach; Contribution toward an Holistic Conception of Social Work*, CSWE, 1969, p. iii.

2. 一般システム理論家たちの用いる術語であるエントロピー、平衡、フィードバックという概念の、ソーシャル・ワークにとっての効用を論証したこと。
3. 伝統的ソーシャル・ワーク理論の多くは、一般システムの枠組において体系化され、統合され、そしてまた力強く提示されるということを論証したこと²³⁾、以上である。

ヤンチルも一般システム論のソーシャル・ワークにおける7項目の潜在的価値を示しているのであるが²⁴⁾、コンプトンとギャラウェイはさらに詳細に検討している。長くなるが敢えてその要約を列挙してみたい。

1. ソーシャル・ワークに必要である、多様かつ多量な情報の収集と整理を可能にさせる。
2. システムの概念は、個人から社会にわたるソーシャル・ワークのクライアントに等しく適用できる。
3. 社会問題に関する多様な要素、関連、変革についての認識枠組を提供する。
4. 個人と環境との相互作用に焦点をあて、そのインターフェイスおよびコミュニケーション過程に注目する。
5. 人間を主体的行動の出来るパーソナリティ・システムであると前提し、その変革目標を確認する。
6. システム概念の適用によって、クライアントの自己決定、変革過程への参加を支持する。
7. システムの目的をワーカーの考察の中心におく。
8. ソーシャル・ワーカーの主たる機能は、全ての人々に対して相互変革の機会を提供し、維持することであるということが明らかになる。
9. ワーカーは孤立化していく人々、およびシステムに関わるべきことを示す。
10. 変革と緊張はオープン・システムにとって病的なものではなく固有のものであるとの考えに立ち、それらの阻害要因に注意を向けさせる。

11. システムの境界という概念は、ワーカーをしてクライアントの権利、境界をこえて移動する方法に関心をもたしめる。
12. 一部の変革は全体に影響を及ぼすという認識は、有意味な変革のための介入のポイントを選択する重要性を示している。
13. ワーカーとクライアントを同一の社会システムという相互作用の場の構成要素として考える²⁵⁾。

システム・モデルはソーシャル・ワーカーに対して、個別的特性から相互作用および相関性へその視点を転ずる概念枠を提供するが、しかしこの新しくまた見慣れないものに対する抵抗に加えてシステム論そのものの特定の側面をもっている。すなわち、システム論の問題点として次の点が指摘されてきた。

1. 非常に抽象的である。
2. システム論の概念がまだ統一されておらず、しばしば混乱へと陥る。
3. 用語が十分理解されていない今の段階でシステム用語を用いることは、教育に失敗するだけでなく、まだはじめていない人を疎外し、またいらいらさせるであろう。

そこでこれらの問題を明確にし、システム思考を実践者に近づけるという課題は、とりもなおさずシステムの概念モデルが、われわれの考えを拡大させ、無限に広がるデータの処理を可能にさせること、すなわちわれわれに、**to think about the unthinkable**を援助することに他ならないという期待があるからである²⁶⁾。

これらの課題については以後ソーシャル・ワークにおいて、また他の領域におけるシステム論研究の開発によってかなり整備されてきているといえよう。新しいアプローチに遭遇したときに陥りがちな誘惑——ざっとみて従来の考えと大してかわりないという判断を下したり、単に一般システム論の用語におきかえただけだと考えたり、新しい理論のある側面のみをとって古いものに結びつ

23) *Ibid.*, p. 70.

24) 拙稿、『社会福祉計画論序説〔II〕』、関西学院大学社会学部紀要、第28号、昭49、p. 61.

25) Compton and Galaway, op. cit., pp. 66—67.

26) Ann Hartman, "To think about the unthinkable," *Social Casework*, vol. 58, No. 8 (Oct. 1970), pp. 467—468.

けようとする選択的アプローチをとったりしてはならないであろう²⁷⁾。

以上、検討してきたように、システム論はソーシャル・ワークにとって実に重要な潜在的価値をもっていると考えられるのであり、軽卒に拒否す

るのではなく、また安易に受け入れるのでもなく、ソーシャル・ワーク実践のより以上の発展のために、謙虚に検討を続けていくべきであると考え

27) Anthony Forder, "Social Work and System theory," *The British Journal of Social Work*, vol. 6, No. 1, 1976, pp. 23—24.